大学における日本語教育の可能性

― 日本経済大学の「これまで」と「これから」―

Possibilities for Japanese Language Education at University
－ A Case Study of the Japan University of Economics

髙井　曜子[1)]　中島由季子[1)]　陳　秀茵[2)]　二宮いづみ[2)]
Yoko Takai[1)]　Yukiko Nakashima[1)]　Xiuyin Chen[2)]　Izumi Ninomiya[2)]

坂井　ケイ[3)]　中里亜希子[1)]　福重　一成[4)]
Kei Sakai[3)]　Akiko Nakazato[1)]　Kazunari Fukushige[4)]

論文概要

日本への留学生が26万人を超え、30万人計画が現実となりつつある。本学においても、非漢字圏の留学生が増え、国籍や学習目的が多様化し、様々な留学生が入学してきている。また、2010年度からは３キャンパスとなり、それぞれ異なる環境の中で日本語教育に取り組んで来た。

創立50周年を機に、これまで３キャンパスで実施されてきた日本語教育を振り返ることによって、今後の教育の更なる充実が必須であることが強く認識されている。

そこで本稿では、３キャンパスにおける日本語教育の歴史と現在の取り組みをまとめ、大学においてどのような日本語教育が求められているのかを探る。そして、今、留学生のために何ができ、何をするべきなのかを考え、今後の展開を検討する。

キーワード：留学生、大学、日本語教育、日本語能力

１．はじめに

日本経済大学は2010年度より、福岡キャンパス、神戸三宮キャンパス、東京渋谷キャンパスの３キャンパスとなったが、以後８年にわたり、独立行政法人日本学生支援機構（Japan Student Services Organization：JASSO、以下 JASSO とする）による「留学生受入れ数の多い大学」で、上位２位から５位の間に位置している。このように留学生が多く、また例にもれず非漢字圏の学生の割合が増えている本学において、日本語教育が負う責任と担う役割は大きい。

本稿では、これまでの本学における日本語教育を振り返り、今後、留学生の日本語力向上のために大学が為すべきことを検討した内容を報告する。

1) 日本経済大学経営学部経営学科　2) 同経済学部商学科　3) 同経済学部経済学科
4) 同経済学部経営法学科

２．留学生受入れの変遷

まず、日本への留学生の変遷と本学の留学生入学者数の変遷を見ていく。

2-1　日本への留学生の変遷

国際競争力を高め、優秀な人材を獲得する目的で、1983年に「留学生受け入れ10万人計画」が打ち出された。2003年には10万人計画の数値目標が順調に達成され、留学機会が拡大する局面を迎えた。2008年には「留学生受け入れ30万人計画」により、「優れた留学生の獲得」という目的が掲げられた一方で、深刻な少子高齢化問題を背景に、留学生の受け入れにおいて「質」より「量」に重きを置く側面が顕在化した。特に少子化による定員割れによって苦境に立たされた大学では、積極的に留学生を受け入れるための取り組みが活発化している。

このような取り組みの成果として、年々外国人留学生が増えている。JASSO によると、2017年５月１日時点の留学生数は267,042人となり、30万人の大台に到達する勢いである。日本政府は「優秀な留学生を戦略的に獲得していく」として高度な人材を取り込もうとしているが、深刻化する18歳人口の減少を留学生でカバーする狙いもある。その動きとして、留学ビザ申請のハードルが下がり、アルバイト制限が緩和されてきた。留学生の出身地域の内訳をみると、１位中国107,260人、２位ベトナム61,671人、３位ネパール21,500人、４位韓国15,740人、５位台湾8,947人（JASSO「平成29年度外国人留学生在籍状況調査結果」）という調査結果が出ている。留学生の中には、学力や学習意欲が低く母国での進学を断念した者や、就労目的で留学に来た者が増えているのも事実である。特にベトナムやネパールでは、留学ブローカーに高額な手数料を支払うため、借金してまで来日する者が大半である。このような背景から、日本での学費や生活費、また借金返済のため学業よりアルバイトを優先してしまう「出稼ぎ留学生」が多くなる一方である。

こうした状況の中、本学が今までに受け入れてきた留学生の変遷について、次節で触れる。

2-2　本学の留学生入学者数の変遷

本学が３キャンパスへ拡大したのは、2010年度からである。図１は入学者数の推移を表している。2010年度の留学生入学者数は約1,700名であり、直近の2018年度は約1,200名である。

2012年度の入学者数は、前年の東日本大震災の影響もあり大きく数値を下げた。その後2013年度に一度回復するが、漢字圏の入学者数は減少の一途をたどる。逆に、非漢字圏の入学者数は増加を続け、彼らの多くはベトナム、ネパールの出身である。

図２は、漢字圏・非漢字圏の割合を示したものである。このグラフからわかるように、現在では非漢字圏出身の学生数が全体の８割ほどに上る。

これらの変遷を背景として各キャンパスで実施されてきた日本語教育を、次章で振り返っていく。

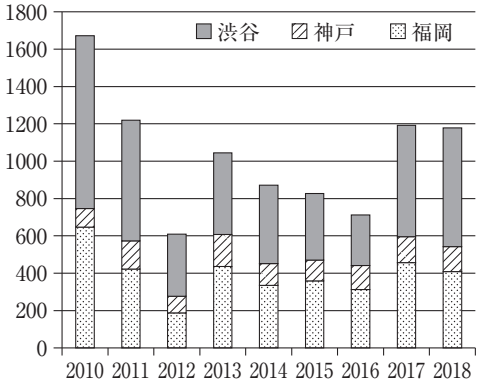

図１　留学生（３キャンパス）の入学者数

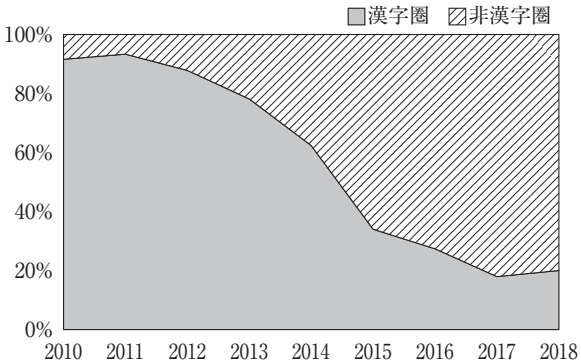

図２　漢字圏・非漢字圏の割合

３．本学の各キャンパスにおける日本語教育の歴史

3-1　福岡キャンパス

日本経済大学（当時は第一経済大学）は、1992年に留学生等に関わる入学を特別専攻規定という枠で認める学則を整備したものの、1996年に英国ケンブリッジ大学フィッツウィリアムカレッジ、オックスフォード大学セント・アンド・カレッジと姉妹校協定を締結するまでは、実質的かつ積極的な留学生の受け入れは行われてこなかった。しかし、この姉妹校協定をきっかけとして、イギリスから毎年10名程度の留学生を受け入れるようになり、それに伴って日本語教育や日本文化の授業提供及び留学生の入学を視野に入れたプログラムが開始された。このイギリスからの留学生は１年間の人的交流であるが、17年を経た今日も絶えることなく続いている。

また、2001年にはアジアに門戸を開き、韓国と台湾に事務所を開設した。この２国より現地募集を経て多くの留学生を受け入れ、４月に80余名の韓国人学生、９月に50余名の台湾人学生が入学し、半年間の集中日本語コース及び日本事情や歴史特講が開講された。本学がアジアからの留学生を受け入れたのはこれが最初だと言える。このプログラムによる学生数は、台湾の SARS 問題や韓国経済の低迷により減少傾向となりながらも2011年まで続き、2012年には本大学留学生別科として独立させ、大学附属の予備教育課程という位置づけとした。

この間、2008年に政府が「留学生30万人計画」を打ち出すや否や、それまで入学実績のなかった大学進学準備教育課程である日本語学校等からの留学生の受け入れも開始した。JASSO によると、初年度は522人の留学生が入学し、翌2009年には833人、３年目には日本で４番目に留学生の多い大学として名を馳せるまでになり、2010年には本キャンパスに約1,500人もの留学生が在籍している。

結果、2008年から2012年までの５年間は本大学内に、現地から直接入学してくる集中日本語コース（のちに留学生別科）の留学生と、日本国内の予備教育課程から進学してくる学部の留学生の２種類の学生が在籍しているという複雑な受け入れ形態をとっていた。このように、学内に入学形態の違う留学生がいることにより、カリキュラム上の複雑さや日本語教育の教授法が分散化し、混乱を来す可能性が出てきた。そこで、2013年以降はイギリスの留学生に対するプログラム以外の日本語コースを

整理し、日本語学校等からの進学を主幹とした留学生の受け入れ一本化を図った。

その間、日本語教育のカリキュラムも従来のレベル別日本語に加え、「ビジネス日本語」や「実用日本語」など日本語関連の特別科目を充実させた。また、日本語能力も来日背景も多様化した学生の日本語力向上に資するために、レベル分けテストの強化によるクラス分けの細分化や、学内一斉テストの導入による日本語学習意欲の意識づけを目的とした学内挙げての日本語教育に取り組んでいる。

前述の通り、2020年までに留学生を30万人にまで増やすという政策の波にのり、2018年度も400人を超える留学生が入学してきている。今後もその時々に対応する日本語教育を大学全体で考え、対応していく必要があるだろう。

3-2　神戸三宮キャンパス

2010年４月、本キャンパスは経済学部商学科のみの単科キャンパスとして開設された。

開設された当時から、関西周辺をはじめ日本国内の日本語学校や専門学校の留学生を主として受け入れてきた。そのような状況もあり、留学生の学習目的やニーズは比較的同質性が高かったと言える。また、本キャンパスの留学生数は他キャンパスに比べて少ないため、少人数クラスで日本語授業を実施していることが特徴として挙げられる。そのほか、2010年度から次のように日本語教育のカリキュラムを構成した。

2010年度には、留学生が専門科目を学習する手助けとして、週１の選択科目に「日本語A（上級）」と「日本語Ｂ（中級）」２レベルの日本語授業が設置された。2011年度からは更に、「中上級」「初級」の２レベルが加わり、合わせて４レベルのクラスに分かれて授業が行われた。当時、2-2で示した通り、漢字圏の学生が９割以上を占めていたため、日本語授業は日本語能力試験に向けて語彙と文型の意味用法に重点が置かれていた。

2013年度からはカリキュラムが大きく変わり、「日本語Ⅰ」から「日本語Ⅴ」の５レベルが設置され、３キャンパスが統一シラバスを採用することになった。それまで、テキストや授業内容などが担当教員に任されていた状況が改善され、より均一的な質が確保できるようになった。また、この年度より日本語の授業が週２回の必修科目（１年生、２年生）になり、留学生の日本語学習時間や学習意欲を維持するための重要な機会となっている。

さらに、2015年度、本キャンパスでは入学者の４割以上が非漢字圏となり、2016年度に至っては、非漢字圏の入学者数が漢字圏の約３倍となった。これに合わせて、授業中に配布するプリントの全ての漢字へのルビ振りや、漢字が含まれた語彙の説明により多くの時間をかけるなど、従来の方法を大きく変化せざるを得ない課題に直面している。ただ、非漢字圏の学生は全国的に増加傾向にある。この課題は「時代の先取り」であり、最前線の挑戦とも言えるだろう。

3-3　東京渋谷キャンパス

2010年４月、本キャンパスは、神戸三宮キャンパスと同時に経営学部経営学科のみの単科キャンパスとして開設された。留学生のための日本語クラスは、他キャンパスと同様に選択科目として設置され、２レベルに分けて週１回の授業が行われるところから始まった。秋学期からは「ビジネス日本

語」と「実用日本語」の授業が始まり、留学生を対象とした科目は厚みを増していった。そして、２年目を目前に迎えた2011年３月11日、東日本大震災に見舞われた。東日本の大きな被害や福島第一原子力発電所の事故が報道されると、志半ばで帰国する留学生もあり、その後も来日する学生数が減少して本キャンパスも大きな影響を受けた。また、2011年度は電力の使用量を抑えるために、節電の努力を積極的に行うことが余儀なくされ、学習環境の厳しい中で授業が行われた。

一方、前節の通り、この年から日本語クラスが４レベルに増え、本キャンパスでも、各レベルで日本語能力試験の合格を主な目標として学習が進められた。この時、レベルによっては複数のクラスとなったため、同じレベルの担当教員がチームを作り、学習内容について話し合った上で授業を行う現在の形が始まった。2013年度に週２回の「日本語Ⅰ～Ⅴ」の授業が選択必修となり、３キャンパスが同一シラバスで授業を行うようになって以降も、レベルごとにチームが作られ、担当教員同士で細部まで話し合い、教材や試験問題を共有しながら授業が行われていることは、現在も変わらない。

また、東京渋谷キャンパスでは、2012年度に日本語以外の授業での学生の理解を助けるために、日本語の授業内で「経済用語」を扱う取り組みが始まった。学期ごとに150の項目を取り上げ、２年間で600の単語を学習する本キャンパスのオリジナル教材が作られた。この教材は、改定を重ねながら現在も使用されている。

本キャンパスのもう一つの特徴としては、過去７年に渡って日本語スピーチコンテストの発表の場となってきたことが挙げられる。学生たちは、予選を勝ち抜いてきた留学生による迫力ある生のスピーチを本選の客席で聞くことができる。また、渋谷は東京を代表する繁華街の一つであるが、それ以上に、最先端のファッションやエンターテインメントなどの若者文化を発信する街でもある。新しい文化を身近に感じながら、渋谷という“生きた教材”を生かした学習環境を構築していくことが求められている。

４．本学３キャンパスの連携

4-1　黎明期

4-1-1　日本語スピーチコンテスト

本学は2010年度から３キャンパスとなったが、当初、３キャンパスの日本語教員は、代表者のみが必要な情報交換を行う程度であった。その後、2011年度に東京渋谷キャンパスで行われた日本語スピーチコンテストが、2012年度に３キャンパス合同で行われたところから、キャンパスを越えた日本語教員の交流が始まった。

本コンテストは、2013年度には「全日本留学生日本語スピーチコンテスト」として対象を全国の留学生に広げ、2017年度の第７回に至るまで毎年度開催されてきた。規模は年々拡大し、2017年度の作文応募は1,700名を超え、外務省や経済産業省をはじめ多くの企業や団体から後援や協賛を得ている。また、審査員や来場者からは、留学生が語る内容や日本語レベルに対する称賛を受け、本コンテストの意義は高く評価されている。

日本語スピーチコンテストを開催することは、留学生を多く抱える大学として意義深い。スピーチ

する出場者のみならずスピーチを聞く学生にも大きな刺激となっている。また、学外全国から留学生が集まるコンテストが公開されることにより、本学が異文化理解と国際友好親善の場としての役割を果たすことになっていると言えるだろう。

4-1-2　シラバスの統一

2013年度より、前章でも触れた通り、それまで各キャンパスが独自に作成していたシラバスを３キャンパスで統一することになり、使用テキストも統一された。シラバスの統一により、日本語教育の中心となる授業内容について共通の大枠が設けられた意味は大きかった。

しかし、授業計画の詳細や日々の授業内容についての情報共有は各キャンパス内にとどまり、３キャンパス全体では記録に残る形では共有が為されてこなかった。

4-1-3　統一テストの実施

2016年度、それぞれに特色ある３キャンパスの学生の日本語能力について、教員が客観的に把握する必要性から、３キャンパス統一のテストを実施することが試みられた。内容は、「実用日本語検定」の問題形式で作成し実施したが、学生がアルバイトで忙しい土曜日に開催することの難しさや３キャンパスそれぞれの抱える問題から、統一したものとは言い難い結果となった。

2017年度には、「日本語能力試験」の問題形式で授業時間内に実施したが、試験時間の確保や採点等、やはり実施環境に様々な事情があり、春秋通して実施できたのは福岡キャンパスのみであった。

4-2　確立期

前節で述べたように、３キャンパスは徐々に連携してはきたが、個別の分野にとどまっており、本学の日本語教育が目指す方針については話し合われてこなかった。しかし、今後の教育の充実には、３キャンパスが共通認識を持ち連携していくことが必須である。

そこで、2017年11月に３キャンパスの代表者が話し合い、３キャンパス共通の目標を掲げ、今後も連携して取り組んでいくことを確認した。その時にまとめた大枠、「日本語クラスの目標」と「具体的な取り組み」を、次に記す。

4-3　日本語クラスの目標

本学においては、留学生一人一人が大学生として日本で生活し、専門的な知識を身につけるための日本語能力を養うことを目標とする。体系的に学習できる総合的なクラス「日本語Ⅰ～Ⅴ」と、「ビジネス日本語」、「実用日本語」のクラスを提供し、それぞれの能力に合ったクラスで学習する。１、２年生は週に２コマ以上の日本語授業を受けることとし、３年生以上にも継続した日本語学習を促す。目標の詳細は、表１のA～Cのとおりである。

表１　日本経済大学の日本語クラスの目標

A．大学で必要とされる力を養う
①「読む・書く・聞く・話す」の４技能の他、考える力、自ら調べる力など、日本語で授業が受けられる日本語力を養う。
②大学の履修規定を理解する力、窓口で質問や依頼ができる力など、大学生活のための日本語力を養う。
③学生同士が日本語を用いて交流できる力を養う。

B．一人一人の社会的・職業的自立に向け、能力や態度を養う
①資格試験に合格する力を養う。
②敬語を使う力や社会人としての習慣を学ぶ力を養う。
③履歴書やエントリーシートなどに自分を表現する力を養う。

C．日本文化を理解し、日本で生活するための日本語力を養う
①日本文化を理解するための日本語力を養う。
②生活する上で必要な日本語の力を養う。

4-4　日本語クラスの具体的な取り組み

教育の質と教員の質を守り、継続的に授業の質を保証する枠組みを作るために、表２の項目に意識して取り組んでいく。

表２　日本語クラスの目指す取り組み

A．定期試験の問題：レベルごとに形式を共有する
試験問題にクラスごとの質の差が出ないようにし、かつ各クラスの個別の学びが評価できるようにするため、レベルごとに試験の形式のみを共有化する。例えば、漢字・語彙・文法・読解などのそれぞれの力を測れるよう、問題の形式や数等を共有する。

B．一斉テスト：３キャンパスで実施し学習成果を分析する
日本語を受講する全学生を対象に、学生各自のレベルに合った問題で一斉テストを実施し、３キャンパス全体の日本語力を測るとともに、結果を分析、検討し、授業の質の向上を図る。前年度との比較、学生個人の伸びなどを通して、改善点を考える根拠とする。

C．各種資格試験：受験を推奨する
外部の公的な試験によって、客観的に実力を確認する。学習の目標となるだけでなく、資格を取得することで学外に向けて日本語能力の証明ともなるので、学生ができるだけ受験できるように促し、合格に向けての準備をサポートする。奨励制度も活用する。

D．学習行動調査：学生自身が自己評価できる体制を整える
定期試験などの到達度テストでは測ることの難しい学習の成果を、学生自身が自己評価できるようにする。

E．学生の個別支援：クラス担任と連携する
日本語授業は週２回のため、担当教員が学生のことを把握できるチャンスも増える。日本語担当教員の気づきがクラス担任に伝わるシステムをつくる。

なお、Bの「一斉テスト」は、4-1-3で述べた「統一テスト」の名称を変えたものである。2018年度は６月と11月に、「日本語検定」を利用した一斉テストが３キャンパスで同じ週に行われた。すでに成績結果が出て学生個々人のデータもそろっていることから、今後の日本語教育への活用が期待される。

以上、教員の立場からの目標を掲げたが、日本語を学習する学生自身はどのような学びを望んでいるのか、それを調査するために行ったアンケートについて次章で検討する。

５．留学生へのアンケート調査

2018年６月、本学３キャンパス合同で「日本語クラスで勉強したいこと」についてアンケート調査を行った。対象は、N2 合格を目指す「日本語Ⅱ」クラスの留学生351名（福岡Ｃ：１年生99名、神戸Ｃ：１、２年生88名、東京Ｃ：１年生164名）である。対象学生の国籍は図３のとおりである。

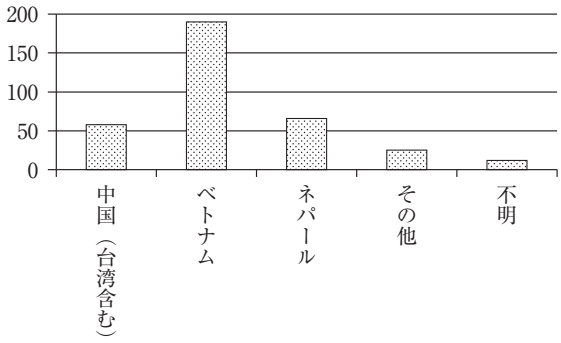

図３　アンケート対象学生の国籍

本アンケートの目的は、現在本学で学ぶ留学生が日本語授業に求めていることを調査し、「漢字圏と非漢字圏」や「３キャンパス間」でどのような相違点があるか、また４章で掲げた「目標」と乖離していないかを明らかにすることである。

アンケート集計の結果、３キャンパス間での相違は見られなかったため、以下の分析は漢字圏と非漢字圏の学生の比較をもとに行う。

5-1　留学生が勉強したい「学習項目」

まず、「日本語のどんな学習項目が勉強したいか」について、11項目から複数選択可で選んでもらった。

結果は図４のとおり、「漢字を読む」と「漢字を書く」の２項で、非漢字圏の割合が極端に多くなっている。

非漢字圏の学生の中には、常用漢字だけで2,000字余りある漢字を数年で身に付けることができず、漢字に苦手意識を持ってしまっている者も多い。だが、大学での学びに漢字力は必須である。大学で

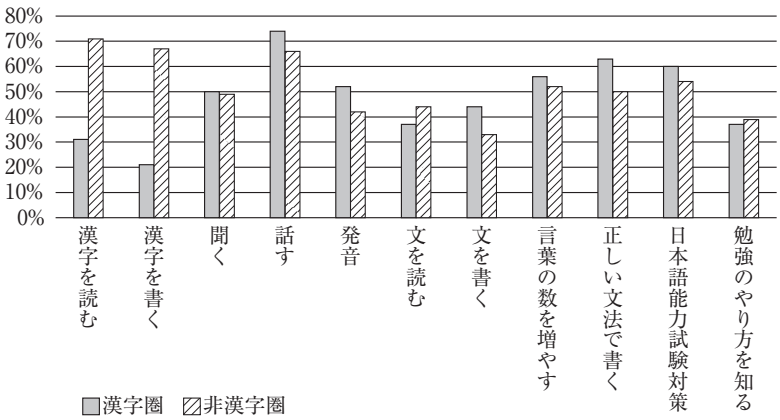

図４　留学生が勉強したい「学習項目」

の漢字学習に関しては、各クラスでの実践を共有し、より体系的なプログラムへの変更を考えていく必要がある。

一方、漢字圏の学生は、非漢字圏の学生より「話す」「発音」「文を書く」「正しい文法で書く」を勉強したい項目として多く選んでいる。前の２項目は、漢字圏の学生が表意文字である漢字に頼るため発音や話すことが苦手になる傾向があることに加え、非漢字圏の学生がクラスで積極的に話す姿を見て自らの不足を感じていることが影響していることも考えられる。

漢字学習についてのみを考えると、漢字圏と非漢字圏でクラスを分けるという方法もあり得る。しかし、混在するクラスであるからこそ、両者がそれぞれの得意な能力を発揮し合い、刺激し合うことができると言えるだろう。

また、「話す」は、非漢字圏の学生も約65％と高く、漢字圏と非漢字圏の合計では最多の希望となっている。多くの学生が話す力を伸ばすことを希望している。この結果を踏まえ、各教員は授業の中で学生が話す機会を意識的により多く取り入れるよう、改善していくことが求められる。

5-2　留学生が勉強したい「場面」

次に、「どんな場面で使われる日本語が勉強したいか」について、８項目から複数選択可で選んでもらった。回答は図５のとおり、前項の「勉強したい項目」に比べて両者の違いは顕著ではなかった。

留学生の多くが希望する場面は、出身に関係なく、一つは「日本語でおしゃべりする」時の日本語であった。これは、前項で「話す」を選んだ割合が高かったことと重なる。

更に回答が多かったのは、「大学の授業を受ける」場面であった。大学の講義は「日本語を学ぶ」のではなく「日本語で学ぶ」ため、日本語学校とは異なりハードルが高い。だが、これまでの日本語授業では、文字・語彙・文法などを系統立てて学び、基礎力を固め、能力試験対策等をすることを重視してきた。

今回の調査から、日本語クラスにおいても大学での受講やゼミ活動、大学生活に直接役立つ内容を

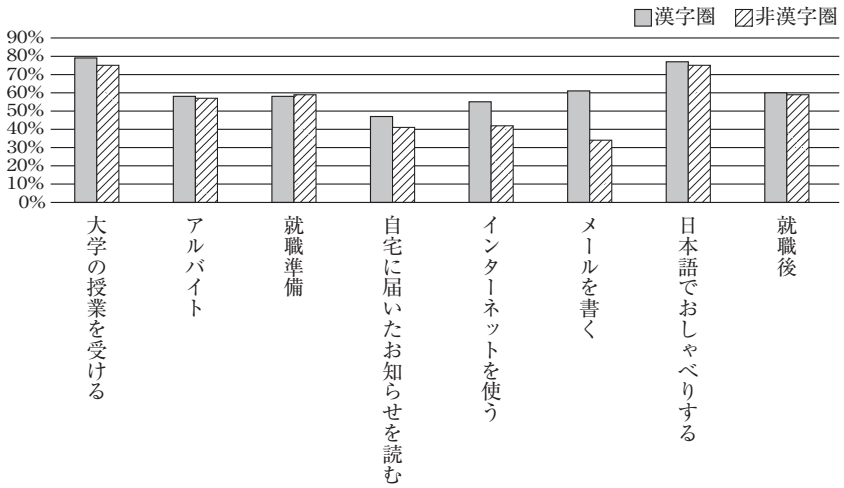

図５　留学生が勉強したい「場面」

もっと扱った方がよいといえる。例えば、ノートの取り方や質問の仕方、質問への答え方、自分の意見のまとめ方、長文のまとめ方、レポートの書き方などである。このようなアカデミック・ジャパニーズの教育は、キャンパスによってはクラス担任もゼミで行っており、ゼミクラスと日本語クラスとの連携等、今後の検討が求められる。

上記２項のほかには、「アルバイト」「就職準備」「就職後」と、仕事に関わる場面での学習を希望する割合が高くなっている。本学では２年生以降「ビジネス日本語」を２学期にわたって選択受講できるが、総合的な「日本語Ⅰ～Ⅴ」のクラスにおいても、例文やロールプレイ、ペアワーク等でなるべく仕事の場面を取り入れる等、各教員が工夫していきたい。

一方、調査結果で意外だったのは、「お知らせを読む」「インターネットを使う」「メールを書く」など、読み・書きに関連する場面を非漢字圏の学生があまり選択していないことである。これは、今回の調査対象が１年生中心であったため、就職活動等でインターネットやメールを使う機会が少なく、必要に迫られていないことが要因として考えられる。

5-3　日本語で困っていること

アンケートの最後に、「今、日本語で困っていること」を、「大学、アルバイト先、家、その他」の４つの回答欄に分けて自由記述で書いてもらった。

集計結果の有効回答に着目すると、「日本語Ⅱ」で学習する者の多くは、大学では「漢字の読み書き・理解」の他、「授業内で発表するのがむずかしい」「意見が言えない」など、発話に関して問題視していることがわかった。

アルバイト先で困っていることとしては、上司や仕事仲間、あるいは客との会話の難しさを挙げている学生が多く見られた。「話す」ことは、その場での対応力が求められるため、漢字以上に「できない」という感覚を持ってしまうと思われる。また、１年生ということもあり、まだ就職活動等でメールを書く必要性がなく、「読む」ことより「発話できない」ことが眼前の問題となっているのかもしれない。

家では、「手紙や書類（保険・年金・税金等）、お知らせが来た時」に困っているという回答が多かった。

5-4　アンケートのまとめ

5-3の結果は、5-1、5-2での分析と共通するところが多い。同時に、4-3で日本語クラスの目標として掲げたA～Cの項目とも重なっている。

大学は、教育の指針を持つと同時に、学習者が日本語で困っていることを定期的に調査し、学習者の多くが直面している問題や個々人の問題を把握することが求められる。また、天災の多い日本で生活する学生が防災を意識し、「緊急速報メール」等も読めるようにしておくことも、教育機関の責任である。日本語クラスを越えて支援できる環境を整えていく必要があるだろう。

６．今後の展開とまとめ

本稿では、これまでを振り返り、現状を把握し、これから進んでいくべき道を探ってきた。

留学生数の多さ、非漢字圏の学生の急増、進学目的の変化等、環境が目まぐるしく変わる中、本学では３キャンパスがより一層の連携をとりながら動き始めている。４章で掲げた目標も実践の道半ばであり、今後さらに検討していくことになる。

漢字に悩む学生や得意な学生、学習意欲の低い学生や高い学生、卒業後すぐ帰国したい学生や日本での就職を目指す学生、経済的に厳しい学生やゆとりのある学生等、「大学で学ぶ留学生」は様々である。学生の多様化を前に、大学における日本語教育は、ただ文法項目等を教育するだけでは不十分である。学生が大学生活をスムーズに送れるように、学生のキャリアを意識し、よりよい学習環境を整備していく必要がある。３キャンパスで目標を掲げると同時に、各教員は、他の教育機関で行われている多くの実践例も参考にしながら、それぞれの個性を活かして創意工夫を重ねた授業を行っていきたい。

一方、留学生の学習意欲に応え、あるいは意欲を喚起し、日本語力を伸ばしていくことは、日本語教員だけでは限界がある。３キャンパスの日本語教員が連携すると同時に、大学内での様々な部署との連携が不可欠である。留学生一人一人が、日本語での学びや日本語を使った生活を充実させていくことは、本人のキャリアに関わるだけでなく、人口減少が続く日本社会にとっても非常に有意義なことである。大学をあげて取り組んでいきたい。

参考資料

「学生支援に関する各種調査」独立行政法人日本学生支援機構
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/index.html，2018 年 7 月 30 日.
『学生便覧日本経済大学福岡キャンパス』平成 3（1991）年度～平成28（2016）年度